

2018年度しあわせ研究

奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究 II
—左側面銘文として刻された書と成立過程—

研究員 廣瀬 裕之
漆原 徹
遠藤 祐介



薬師寺東僧坊にて▲

私たちは、「中国仏教の日本への受容」をテーマとし、「しあわせ研究」の調査を続行する中で、初期仏教を象徴するものといえる奈良時代の日本最古の「佛足石」に刻された銘文の書美とその背景について注目し、書道学・歴史学・仏教学から考察を加え研究している。

本論考では、昨年度の「正面銘文」の研究成果を踏まえ、本年度は「左側面銘文」の先行研究による釈文と、^{てつわほん}埴和本精拓の拓影との比較検討に加えて、新たに原刻写真と現物の熟覧による調査から書線の確認を行い碑文の復元を試みた。また銘文の釈文と訳注を施し、佛足石成立の過程についても考察した。今回の薬師寺佛足石の碑文調査にあたっては、何よりも薬師寺の特別許可をいただけたことに感謝したい。一般拝観時間終了後の^{ひとけ}人気のない大講堂で、懐中電灯の光を様々な角度から照射して、摩滅して判読しがたい書線をたどりながら文字を読み取る作業に没頭できた。不整形の佛

足石碑文の角礫岩は、各所で剥落し磨耗した部位も多く、碑文の判読は困難な箇所が認められたが、拓本や写真で明らかにできない部分を丁寧に読み取った。

我が国における佛足石は、唯一、薬師寺の国宝佛足石以外は、すべてが江戸時代以降に作成されたものしか存在が指摘されておらず、佛足石研究は足型の形式分類からそれぞれの形象が示す仏教的な意味の考察が大半を占めている。我々の研究は、最古の佛足石の碑文研究から日本での佛足石の原点の意義を考察し、古代の人々が佛足石を拝することでどのような幸せを感じることができたのかについて思いをはせた。

また指摘されてこなかった中世の佛足石の発見に努めてその空白の時代を明らかにすることをもうひとつの目的として、今回は京都法然院と安土城での二点の存在を確認できた。今後も薬師寺佛足石碑文の全貌を明らかにし、また他の古代佛足石や、中世佛足石の発見に努めて、近世に至る民衆の佛足石信仰の実態について明らかにしていきたいと考えている。

なお、本成果は、研究論文として『武蔵野教育学論集』第6号（2019年3月・武蔵野大学教育学研究所発行）に掲載している。